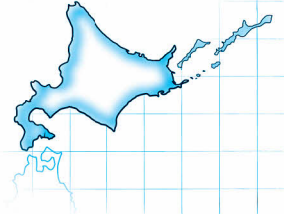


# ペリフェリ ③



## 外縁の記憶と皆保険

日本赤十字社 常任理事 渡邊 芳樹

わが国の少子高齢化・人口減少は本格化し、親の生活や介護を子供世代が騎馬戦型で支える社会が現実となった。2060年頃には肩車型社会と言われ、皆保険は大丈夫かと心配されている。

ただこの問題は何も社会保障の分野に限らない。とくに若年世代の圧倒的な減少は教育、防衛をはじめ社会の基礎を支える諸制度の足元を揺るがす。国を挙げて子育て支援と少子化対策に取り組みむ所以である。

昭和50年、私が厚生省に入省した頃、総人口は増加を続け高齢化率はまだ7%台だった。若き同僚たちは親に仕送りするなど貧しい昔の話だとして豊かな社会と福祉の夢を語っていた。私は若くして所帯を持ち僅かな収入のなかから郷里の親に少額ながら毎月仕送りを続けていた。同僚の話にはついて行けなかった。

私の祖父はまだ江戸時代の慶応2年の生まれ。父は大正2年の生まれで4兄弟の末子。祖父



が北海道に渡り昭和初期に他界するまで皆保険の恩恵は望むべくもなかった。病に倒れた祖父を祖母とその子供達が支え生き抜く大変さを聞かされた。その祖母も昭和30年代に他界した。学校の仕事では足りず近所に借りた畑を耕し祖母と6人の子供達の生活を支えたのは末子の父と母だった。4人兄弟でも親の世話は肩車型。それが戦前戦後を歩んだ父母の時代だった。

末子でスベアと呼ばれた私を含め子供たちは皆国立大学に進学し親元を離れ独立、他界するまで年金生活の両親を支えた。

私自身は現役時代に岡光序治保険局長から、「貧乏人だが係

累がないのが良い」と妙に確かな評価をされた。その私が医療保険、年金など多くの社会保障制度改革を担った。大小合わせ関与した法律は30本余り。負担や給付の姿も随分変わった。そうしたなかで社会の外縁とも言うべき自分の家族史を振り返ると大きな歴史の流れと変わらざる強靱な個々人の営みを強く感じる。

皆保険は日本の社会保障の根幹。世界に誇る貴重な社会的資産である。しかし高度経済成長と若年人口増加の時代に達成された皆保険の前提は様変わり。将来、金融・財政危機等の外的ショックで必要な給付も途絶し立ち枯れしかねない。

また、若年人口の激減、職場や家族の変容、デジタル化の進展、格差の拡大等により他者への想像力の欠如や連帯心の希薄化が進む。適用徴収体制への無関心無理解とも相俟って、皆保険の形骸化が懸念される。深い思慮を欠いた改革は自壊を加速させると肝に命じたい。